



JIC インフォメーション

第 208 号 2020 年 10 月 1 日

特別号・ロシア映画祭シンポ報告

1 部 500 円

発行所: JIC 国際親善交流センター 発行責任者: 伏田昌義

<http://www.jic-web.co.jp>

東京オフィス: 〒160-0004 東京都新宿区四谷 2-14-8 YPC ビル 7F TEL: 03-3355-7294 jictokyo@jic-web.co.jp

大阪・ロシア留学デスク: 〒540-0032 大阪市中央区谷町 2-7-4 谷町スリースリースビル 7F TEL: 06-6944-2341

はりねずみのジェーニャ



ロシア・旧ソ連
国際交流誌

第3回ロシア映画祭 特別企画・シンポジウム

「映画を観れば『今のロシア』が見える」


<http://www.jic-web.co.jp>

第3回ロシア映画祭 特別企画・シンポジウム<全報告>
ソビエト映画からロシア映画へ…………井上 徹…………2P
ロシア映画祭～多様なジャンルの作品を紹介
…………セルゲイ・ノヴォジロフ…………5P
映画祭の価値は観客との双方向の対話にこそある
…………アレクサンドラ・ジューコワ…………7P

ロシアで監督デビューする方法
…………ゲオルギー・サリニコフ…………7P
映画を通じて世界を知る…………矢田部 吉彦…………7P
字幕翻訳の苦勞と醍醐味…………守屋 愛…………9P
<再録>
第3回ロシア映画祭 in 東京(報告記事)…………11P

JIC では、Jクラブ(JIC 友の会)会員を募集しています。
年 4 回の情報満載のインフォメーションをお届けします。

昨年 12 月の第 3 回ロシア映画祭では、特別企画としてシンポジウム「映画を観れば『今のロシア』が見える」を開催しました。シンポには約 120 名の映画ファンが集まり、また映画祭のために来日したロシア側代表団 10 名の全員が参加しました。司会は、東京大学文学部・現代文芸論研究室の沼野充義教授。限られた時間ではありましたが、ロシア側 3 名、日本側 3 名のパネラーが、映画祭の意義やロシア映画の魅力、映画を通じた文化交流の可能性などについて報告を行いました。

以下は、当日のテープをもとに文章化したシンポジウムの記録です（文責はすべて編集部にあります）。

第3回ロシア映画祭 in 東京 特別企画・シンポジウム 《全記録》

「映画を観れば『今のロシア』が見える」



司会：沼野充義

（東京大学文学部教授・現代文芸論研究室）

私はロシア文学・文化の専門家、映画の専門家ではないのですが、ロシア・ソビエトの映画をかなり沢山見てきました。昔書いたエッセイに「ソビエト映画が私を作った」というのがあるくらいです。ただ、日本で一般に知られているソ連・ロシア映画というのは、後ほど井上さんが詳しく話をされると思いますが、革命後初期のエイゼンシュテイン、それから 20 世紀後半のタルコフスキー、パラジャーノフ、アレクセイ・ゲルマン、ソクーロフ、この辺までがビッグネームで、映画好きのインテリであれば誰でも知っています。しかし、今現在のロシアで普通の人がどんな映画を楽しんでいるかということになると、ほとんど知られていません。ですからこのロシア映画祭の企画は私たちにとっても大変貴重なものだと思います。

私の若い頃には、もう 40 年以上も前のソ連時代ですが、ソ連大使館や日ソ関係者が協力してソビエト映画フェスティバルがかなり頻繁に開催されていました。その頃と比べると、むしろロシアが新体制になった今の方が、ロシア映画の現状が日本で知られにくくなっているという印象があります。ということで、この貴重なロシア映画祭の機会を利用してこのようなシンポジウムが開催できることを大変嬉しく思います。

それでは早速、登壇者の方々にお話をいただきます。まず最初に、ソ連・ロシア映画の専門家、第一人者でいらっしゃる井上徹さんに、ソ連時代から現代に続くロシア映画の特徴と魅力について全般的な報告をしていただきたいと思います。



ソビエト映画からロシア映画へ

井上 徹（エイゼンシュテイン・シネクラブ代表）

ソ連が解体してロシアになってから 28 年が経ったわけですが、ソ連崩壊後からこれまでに作られたロシア映画にはあんまり馴染みがない人が多いと思います。

ソビエト映画とロシア映画とで何が違うのか。

ソ連という国は、大帝国であったロシア帝国の版図をほぼ引き継いだわけですが、ロシア連邦共和国を中心に 14 の民族共和国で構成されていました。民族共和国にはスラブ系のウクライナとベラルーシ、バルト三国、コーカサス、中央アジア諸国と、それぞれに素晴らしい映画作品がありました。ですから、ソビエト映画というのは、ロシア映画が周辺の民族共和国の映画を開発した面がありますし、それら民族共和国から刺激を受けてロシア映画が発展した面もあると思います。

ここでは、ソ連の解体で周辺の民族共和国を含めたソビエト情報文化空間というものが解体されたのかどうかという話と、それからソ連解体後のロシア映画の歩みという、2 つの話をしたいと思います。

ソ連時代末期のロシア映画

ソ連時代の末期から現在のロシアまで、特に有名な映画監督を何人か紹介すると、まずはアンドレイ・タルコフスキー（1932－86 年）の名前があがります。今もロシアから権利を買ってその作



品が日本の映画館にかかる。日本人にとって非常に影響力のある監督ですね。『惑星ソリス』『鏡』『ストーカー』『ノスタルジア』といった作品があります。

次に、アレクサンドル・ソクーロフ監督(1951 年-)。彼は 1978 年に全ソ国立映画大学の卒業制作『孤独な声』が上映禁止になり、ペレストロイカが始まった 1987 年に『孤独な声』が公開されて、タルコフスキーの後を継ぐ存在として注目を集めました。今も現役で作品を作り続けており、『ファウスト』『太陽』『牡牛座 レーニンの肖像』『モレク神』『エルミタージュ幻想』など、ほぼすべての作品が日本で公開されています。

ニキータ・ミハルコフ監督(1945 年-)は、ソ連国歌の作詞者であり児童文学者であるセルゲイ・ミハルコフの息子です。『黒い瞳』『ウルガ』『太陽に灼かれて』といった作品で有名ですが、最近では正直言ってあまり良い作品がありません。しかし、ロシアでは映画界のドンとして今も君臨している人です。

このほか、沼野先生が先ほど紹介されたアレクセイ・ゲルマン(1938-2013 年)、それから今回のロシア映画祭の初日に上映されたコンスタンチン・ロプシャンスキー(1947 年-)といった監督がいます。ロプシャンスキー監督は、『死者からの手紙』『ミュージアムビジター』という 2 つの作品が日本で上映されていて、ちょっとマニアックな映画愛好家というか、シネフィルと呼ばれる人たちの間では名だたる監督です。

ペレストロイカとソ連の解体

1985 年にゴルバチョフがソ連共産党の書記長に就任してペレストロイカが始まりました。グラスノスチ(情報公開)の流れの中で公開禁止映画の「棚おろし」が行われて、ソクーロフの作品も再評価されたわけです。グルジアのテンギズ・アブラゼ監督(1924-94 年)の作品でスターリンの恐怖政治を描いた『懺悔』(1984 年制作)が公開されて大きな話題になりました。検閲が緩和されて、社会問題を正面から扱う映画が登場する、そういう時代に入りました。しかしその代わり、国家予算による映画製作から独立採算制へと映画作りの現場も大きく変わります。それまで映画撮影所を通じて国家予算が配分され映画が製作されてい

たのが、要するに民間企業化してプライベートカンパニーで映画を作る方向になり、映画界は混乱します。

1991 年 12 月にソ連が解体すると、それまでの民族共和国を含めたソビエト情報文化空間というものが崩壊しました。ロシアの映画界は製作、配給、公開、すべてにわたって混沌とした状態に陥りました。映画をなかなか作ることができない。作っても見せる場がない。1990 年代はソ連崩壊の混乱の中で、アメリカのハリウッド映画が劇場もテレビも席巻しました。

90 年代は新しい市場経済体制への移行期で、1998 年のアジア通貨危機のあおりでロシアも金融危機に襲われましたが、この危機を克服したところからロシア経済は再成長の軌道に乗り、ロシア映画にも良い作品が出てくるようになりました。

1990 年代の主なロシア映画作品

90 年代に製作されたロシア映画で、まず注目を集めたのはソクーロフの作品です。『ストーン/クリミアの亡霊』(1992 年)、『静かなる一頁』(1993 年)、『マザー、サン』(1997 年)などがあります。

ミハルコフの作品『太陽に灼かれて』(1994 年)、『シベリアの理髪師』(1998 年)も、スターリン時代を負の歴史として描いた作品として評判になりました。これはロシアの中では実は議論がありました。「ミハルコフはソ連時代にいい思いをしている側だったのに、こんな作品を白々しく作ったのは何事か」と言う人も多かったのですが、日本ではこれらの作品をロシアが自らの歴史、ソ連時代の歴史を反省し見直しを始めたものとして扱われているようです。ここに挙げた作品は日本では全て劇場公開され、DVD も製作されています。

セルゲイ・ボドロフ監督(1948 年-)の作品も、『コーカサスの虜』(1996 年)をはじめ何本か日本で公開されています。『コーカサスの虜』は 1996 年の第 9 回東京国際映画祭で上映されました。

アレクセイ・バラバノフ監督(1959-2013 年)、この人は 2013 年に亡くなってしまったのですが、『ロシアン・ブラザー』(1997 年)、『フリークスも人間も』(1998 年)、『チェチェン・ウォー』(2002 年)などの作品があり、これらは全部 DVD が日本で出ています。

『こねこ』(1996 年、イワン・ポポフ監督)という日本でだけ非常に人気があった作品もあります。ネコのサーカスの話ですが、これはロシア映画史には多分残らないでしょう。

復活の 2000 年代～①ソ連世代

2000 年代に入って、やっぱり非常に良い作品がロシア映画に作品が出てくるようになったという実感があります。私は、2000 年代の途中まで毎年モスクワ国際映画祭を見に行っていました。映画祭でのコンテストの他に、ロシア映画だけを上映するプログラムがあって、最新のロシア映画をそこで見ていたのですが、毎年「ああ、今年もろくな作品がないな」と思っていたのが、「あつ、

ちょっと良い作品が出てきたな」と思うようになったのが 2000 年代の初め頃ですね。

いろんな監督がいますが、まずはアレクサンドル・ソクーロフ、アレクセイ・ウチーチェリ(1951 年ー)、アンドレイ・フルジャコフスキー(1939 年ー)、アレクセイ・ゲルマンといった、ソビエト時代からずっと作品を作ってきた人たちがいます。彼らの作品は全部ではないけれど、日本でもかなり上映されています。

ソクーロフは、権力四部作＝『モレク神』(1999 年)、『牡牛座レーニンの肖像』(2001 年)、『太陽』(2005 年)、『ファウスト』(2011 年)の全部が上映されています。

ウチーチェリの『宇宙を夢見て』(2005 年)はロシア・ソビエト映画祭で上映されましたし、『マチルダ 禁断の恋』(2017 年)はまさに今、日本で公開されています。

フルジャコフスキーの『一部屋半 あるいは祖国への感傷旅行』(2009 年)は、東京国際映画祭で上映する話を持ちかけられたのですが、残念ながら採用されませんでした。私は 2000 年代のロシア映画の中では是非見るべき映画の一つだと思います。

2000 年代に登場した監督の中で一番成功しているのはアンドレイ・ズヴァギンツェフ(1964 年ー)です。彼の作品も全部が日本で公開されたわけではないですが、デビュー作品の『父、帰る』(2003 年)、『裁かれるは善人のみ』(2014 年)、最新作の『ラブレス』(2017 年)が劇場公開されています。

復活の 2000 年代～②ゼロ世代

それから、2000 年代には「ゼロ世代」と呼ばれる新しい監督たちが登場します。ソ連崩壊後の混乱をくぐり抜けて 2000 年代に頭角を現した若い表現者たちです。その中で、私がモスクワで観て、「あ、こういう映画作る人たちが出てきたんだ」と、ロシア映画の将来に希望を見出した最初の作品が『コクテペリへの道』(2003 年)です。ボリス・フレーブニコフ(1972 年ー)とイワン・ポポグレブスキー(1972 年ー)の 2 人の監督作品です。この作品の後彼らはそれぞれ独立して映画を作っていて、ポポグレブスキーの『夏の終止符』(2010 年)は日本でも DVD が出ています。

アンナ・メリキャン監督(1975 年ー)も『ルサルカ～水の精の恋』(2007 年)、『アバウト ラブ』(2015 年)などで知られています。

復活の 2000 年代～③二世映画人

もう一つ大事なグループがいます。二世映画人ですね。文字通り有名な映画監督を父に持つ人たちが活躍しています。

フォード・ボンダルチュク(1964 年ー／父はセルゲイ・ボンダルチュク)。彼の作品全てが公開されているわけではないですが、以下の 4 本の作品は日本でも DVD で見られます。『アフガン』(2005 年)、『プリズナー・オブ・パワー 囚われの惑星』(2008 年)、『オーガストウォーズ』(2012 年)、『スターリングラード』(2013 年)ですね。『スターリングラード』は、驚いたことに東日本大震災で国際救援部隊として駆けつけたロシア人部隊が東

北を訪れたところから映画が始まる。話の内容はもちろん第二次世界大戦中のスターリングラード攻防戦なのですが、非常に面白い映画です。

アレクセイ・ゲルマンの息子、アレクセイ・ゲルマン・ジュニア(1976 年ー)。『最後の列車』(2003 年)、『紙の兵隊』(2008 年)といった作品がありますが、残念ながら日本では彼の作品はまだ公開されていません。

セルゲイ・ボドロフ・ジュニア(1971ー2002 年)は俳優として活動し、『コーカサスの虜』、『ロシアン・ブラザー』に出演しました。監督作品を撮ろうとして、冬山で雪崩に巻き込まれて亡くなってしまった。それから、アンドレイ・フルジャコフスキーの息子、イリア・フルジャコフスキー(1975 年ー)もちょっと変わったテイストの作品を作っていて、ロブシャンスキーなんかと似ています。

復活の 2000 年代～④CG 世代

CG(コンピュータ・グラフィックス)を多用した映画を作っている人もいて、ティムール・ベクマンベトフ(1961 年ー)の「ナイト・ウォッチ」(2004 年)はご覧になった方も多いと思います。

オレグ・ステプチェンコ(1964 年ー)はウクライナの監督ですが、ロシアとウクライナの合作で『レジェンド・オブ・ヴィー 妖怪村と秘密の棺』という作品を作っています。ロシア語のタイトルは「ヴィー」。劇場公開されてなくて、DVD で見られる作品ですがこれもなかなか面白い。

2010 年代は目立った新人は出ていないという印象を私は持っているのですが、ロシアの映画製作の技術レベルは高いので、今後、多様なジャンルの多様な作品の登場を期待したいと思います。

ロシア映画祭は今回で 3 年目になりましたが、今後も引き続き新しいクリエイターたちの新しい映画をいろんな形で見せていただきたいと思います。

司会(沼野)

大変短い時間で非常に情報量の多いお話をしていただきました。意外にたくさんの現代ロシア映画作品が日本で公開され、DVD でも出されているということは、ある意味で驚きですね。とはいえ、一般の映画ファンの間ではやはりそんなには知られていない感じです。これはどうしようもないのですが、日本で外国映画というと何といてもハリウッドを中心としたアメリカ映画なんですね。それに比べると、ロシア映画は非常にレベルが高いのですけれども、マイナーな領域にとどまっているのが残念です。

では次はロシア側からお話を順次いただきたいと思います。最初に、セルゲイ・ノヴォジロフさんにお話をいただきます。ノヴォジロフさんはモスクワの God Kino 社代表であり、ロシア映画祭ディレクターであります。ちなみに God Kino 社の「ゴッド」というのは「神様」の意味ではなく、ロシア語で「年」という意味の「ゴート」であるということです。



ロシア映画祭～多様なジャンルの作品を紹介

セルゲイ・ノヴォジロフ

(ロシア映画祭ディレクター、God Kino 社代表)

ロシア映画が日本で高く評価されていることを知り、嬉しく思います。

なぜ私たちは、このように各国でロシア映画祭を開催しているのか。井上さんの解説にもあったように、ソクーロフやゲルマンやミハルコフだけがロシア映画の「顔」になっている現実をくつがえすという意味合いがあります。

今回一緒に来日したリュドミラ・レオンチェフさんはロプシャンスキー監督と『黒いガラス』を製作しました。『深い河』のウラジーミル・ビトコフ監督はソクーロフの教え子です。彼らを含めてこの映画祭で上映される 9 作品の監督のうち 5 名がこの会場に同席しています。高名な何人かの監督以外にもロシアの映画監督はいないかのような印象がありますが、実際はたくさんの映画監督がいます。にもかかわらず、私たちはまるでずっとブラックホールの中に閉じ込められているかのようです。先ほどからいろいろな監督の名前が挙げられています。けれども、オスカー(アカデミー賞外国語映画賞)をとった監督を思い出してみてください。『戦争と平和』(1966 年)のセルゲイ・ボンダルチュク、『モスクワは涙を信じない』(1980 年)のウラジーミル・メニシヨフなどの名前は挙げられていません。

フェスティバル映画とジャンル映画

映画作りに際しては、西側受けを目指すか、たとえばヴェネチア国際映画祭向けに映画作りを行うか、あるいはロシア人が評価する視点で映画を作るかというジレンマがあります。若い監督がフェスティバル向けの映画を撮り、とくに欧米向けに作品を作る場合は、ロシアのイメージが西側ではなかなか暗いという現実がありますので、それに合わせて作ってしまう(笑)。

ロシア国内向けの映画、大衆向けの映画はまた別のものになります。確かに一般の視聴者はアクションやメロドラマを好みます。いわゆる映画人、映画言語を深く理解し尊重する人はその視点で映画作品を観るでしょう。ですがマスで考えると、やはり一般視聴者が好む映画は違うかと思います。

ロシア映画のジャンルは多種多様

このロシア映画祭では、日本の皆さんにロシアに存在する多種多様なジャンルの映画に触れていただきたくて、いろいろな映画作品を持ってきました。今回の上映作品の中にはロプシャンスキーの名前もありますが、これは先程言及された『死者からの手紙』という作品とは全く性格が異なるロプシャンスキーです。また、今回はできるだけ若手の監督の作品を紹介しようと考えました。

ロシア映画のジャンルはたくさんあります。コメディもありますし、メロドラマやファンタジーもあります。ブロックバスター(興行的に大きな成功を収めた作品)も存在します。

井上さんが指摘されたとおり、1990 年代は年間 400 本の映画を製作しながら、銀幕を完全にハリウッド映画に譲ってしまったという現実があります。そして、その頃に制作されていた映画作品を私もほとんど思い出せないという不思議な事実があります。ソ連時代には上映作品のうち国内映画の比率が 75%だったのに対して、現在のロシアではそれが 25%に留まります。しかも、今や国内比率 25%がすごく大きな業績だという論調になっているので、嘆かわしいです。ですが、これはロシアのみならず世界全体の傾向でもあります。

媒体としては多数のテレビチャンネルがあります。テレビ番組の質に関してはさまざまな意見がありますが、ロシアでは今、プライムタイムにはロシア製の映画を流すことになっています。年間 120 本の長編映画が制作されています。ドラマについては正確な情報を提供できませんが、ここ数年厳しい状況になっています。

最大の問題は製作資金の確保

映画産業に対する国の支援について申し上げますと、ロシア文化省およびロシア映画基金が資金を提供しています。そして、全ての映画関係者があらゆる方法で国の支援を得ようと努力しています。コンクールもあります。私自身は脚本委員会のメンバーになっており、様々な作品を検討しますが、もちろん全ての作品が国の支援を受けられるわけではありません。しかし、その支援のお陰でロシア映画がまだ何とか生き延びているとも言えます。

今やスポンサーなくして映画を語ることはできません。ブロックバスターはしばしばテレビの支援を受けて実現します。とくに「第1チャンネル」や、「ロシア」というチャンネルが有力です。テレビとタイアップした宣伝によって観客が映画館に流れる循環が生まれます。

なかなか視聴者を獲得できない映画、配給に乗らない映画の場合、その多くは考える人たちのための映画で、フェスティバル向けの作品が多いのですが、そういった映画のプラットフォームとしてロシア国内で 150 もの映画祭が開催されています。映画祭はこれら作品の配給ルートとしても機能しています。

多民族的な特徴を持つロシア映画

最後に、現在のロシア映画は「ソ連映画マイナス 14 共和国」だと言われますが、確かにユニークかつ多民族的なソ連映画はこの世から消えました。しかしながら、ロシアが多民族的でないかと言うとそれは間違いで、ロシアにはヤクート、カルムイク、ブリヤート、タタールスタン、ハカス、カバルタ・バルカルなどさまざまな共和国があり、それぞれの特徴を持った映画が制作されています。

以上が、ソ連・ロシアで 35 年間映画界に携わってきた者としてのコメントです。次にもっと若手のアレクサンドラさんの意見を聞いていただきたいと思います。



映画祭の価値は観客との双方の対話にこそある

アレクサンドラ・ジュコフ

(ロシア映画祭プログラミング・ディレクター)

ご参加の皆さんがロシア映画についてこんなに豊富な知識を持っていらっしゃることに、まず感謝したいと思います。また、昨年の第 2 回ロシア映画祭で、第 29 回東京国際映画祭(2016 年)で上映された作品(『天才バレエダンサーの皮肉な運命』アンナ・マティソン監督)を特別に上映する許可をいただいたことに対して、矢田部さんにお礼を申し上げます。

最近次々とヒット作を生み出しているニューウェーブの監督について少し補足しておきます。ニューウェーブにおいても、やはりフェスティバル映画とジャンル映画の 2 種類がありますけれども、最近の注目株はまずニコライ・ホメリキ監督。『Ледокол 砕氷船』(2016 年/邦題「アイスブレイカー超巨大冰山崩落」)、『Девятая 第九』(2019 年/邦題「殺人狂騒曲 第 9 の生贄」)という作品で人気になりました。

クリム・シペンコ監督の『Салют-7 サリュート 7』(2016 年)、イゴール・バラノフ監督の『ゴゴリ』三部作(2017-18 年)も大ヒットしました。

映画が描き出す様々なロシアの顔

このロシア映画祭のテーマは現代ロシアの映画なのですが、直接プログラミングしている担当者としてはここで評価めいたことを言うのは難しいですね。



会場での質疑応答、毎回たくさんの発言が寄せられる

各国で行われるロシア映画祭の私たちににとっての最大の価値は、このようなシンポジウムや上映後のトークセッションにおいて、観客の皆さんの反応を読み取り、上映作品を評価するさまざまなヒントを得ることにあります。

例えば、昨日は『ラスト・ボガトゥイリ 最後の勇士』(ドミトリー・ジャチェンコ監督)という作品を上映しました。ロシアのフォークロアに題材をとったファンタジー映画ですが、上映後のトークセッションで、「ダチョウの足がついた歩く家」は何なのかとか、「半分魚のような人間」は何なのかとか、質問されました。私たちロシア人にとっては子供のころから馴染みのある妖怪たちなのですが、日本人にとってはとても目新しいキャラクターに映ったようです。

昨日はもう 1 本、ボリス・グッツ監督の作品『俺たちには死が似合う』も上映されましたが、これは現代ロシアの社会事情を知る大変面白い作品だったかと思います。本日は先ほどサリニコフ監督の『目を閉じれば見える』という作品を見ていただきました。これはロシアを旅するロード・ムービーになっていますが、社会問題もしっかり描かれています。ロシアの少年院の現実、収容されている子どもたちの新しい現実への適応、そして大人と子どもの関係、貧富の格差などですね。貧富の差については、今回の映画祭の初日に観ていただいたロブシャンスキー監督の『黒いガラス』でも現代ロシアの貧富の差が全面的に描かれていました。

映画作品は制作者、監督によってさまざまに描かれるわけですから、ロシアのイメージというものも作品によってそれぞれです。決して一つの正解となる方程式が存在するわけではありません。

司会 (沼野)

では続いてサリニコフさんに発言していただきます。皆さんはこのシンポジウムの前に上映された『目を閉じれば見える』という作品をご覧になったと思いますが、その監督さんです。サリニコ

フさんのお名前は俳優としてはエゴール・サリニコフなのですが、監督としてはゲオルギー・サリニコフという名前を使っておられます。ご覧の通り非常に若くして俳優から監督デビューした方です。



ロシアで監督デビューする方法

ゲオルギー・サリニコフ

(映画『目を閉じれば見える』監督)

私は、ロシアの映画が最近大変若くなってきている。それが最新技術の導入によって起きているということをまずお伝えしたいと思います。

今、映画作りには大きなチームは必要ありません。携帯電話(スマートフォン)を使うだけでもプロ並みの映画が作れます。昨日上映されたグズ監督の『俺たちには死が似合う』は全編スマートフォンで撮影された「モバイル映画」です。もちろんプロでなくても作品が作れます。そしてモバイル映画から入ってきた人でも、やっぱり本格的な映画教育を受けたいという人がいます。

ロシアでプロとしての映画教育をどう受ければよいか、お話ししたいと思います。

ロシアは大きな国で 80 以上の連邦構成主体(共和国、自治州、連邦市や地方など)から成っています。それぞれの構成主体の首都には文化大学があり映画の専攻コースがあります。ですが若手の監督は大都市、とくにモスクワに集中しがちです。なぜなら大都市の方がやはり専門教育のレベルが高いと考えられているからです。モスクワには 2 つの大きな映画教育機関があり、そこを卒業するとフィクション映画、ドキュメンタリー映画、マルチメディア映画の監督になれます。一つは全ロシア映画大学です。もう一つは全ロシア脚本家監督高等教育課程(ДГР)です。数多くの監督が毎年卒業しますが、一学年のうち一人でも成功すると良い方です。良い教育機関で学んでも、そして良い成績で卒業しても、その職業から離れる者がたくさんいます。

逆のパターンもあります。例えばソクーロフ監督はナリチクという地方都市で映画工房を作り、後進を育てています。明後日上映される『深い河』のビトコフ監督はそこで学びました。この作品はロシア最大の映画祭であるキノタヴル映画祭のデビュー部門でグランプリを授与されています。ナリチク映画工房の卒業生はカンヌで大賞を取った実績もあります。

映画学校での教育内容としては、3-4 本の作品を作り、最後

に卒業作品を製作します。卒業作品はさまざまな映画祭のプロデューサーによって評価されます。卒業後は自由の身となりますが、一番難しいのは作品を作るための資金を得ることです。先ほどノヴォジロフさんが言われたように、スポンサーを見つけるか、文化省や映画基金から補助金を得ることになりますが、私は個人的にその基金の補助金で映画を作りました。

ノヴォジロフ

ゲオルギーとボリスは実はウラジーミル・ハチネンコ監督の教え子です。ハチネンコの名前は先程のプレゼンテーションでは言及されませんでしたが、『ドストエフスキー』(2011 年)などの作品があります。やはり有名な監督です。

司会 (沼野)

打ち合わせの時に「今日は時間がないので皆さん短く喋ってください」と強く言い過ぎたせいか(笑)、大変短くお話しいただき、どうもありがとうございました。

それでは日本側のパネリストからお話をさせていただきます。まず矢田部吉彦さんをお願いします。矢田部さんは東京国際映画祭のプログラミング・ディレクターであり、世界中の映画祭をご覧になっています。国際映画祭について幅広い視野から語っていただきます。



映画を通じて世界を知る

矢田部 吉彦

(東京国際映画祭プログラミング・ディレクター)

ロシア映画は本当に多様性に富んでいるなと思います。ロシア映画の日本公開において、今現在大きな出来事が進行中だということを皆さんはご存知でしょうか？実は『T-34 レジェンド・オブ・ウォー』(アレクセイ・シドロフ監督)という作品が公開中で、あんまり宣伝されていないのですが、日本の戦車ファンやアニメファンの圧倒的な指示を受けていまして、局地的にとっても熱く盛り上がっているのです。ロシアで大ヒットした映画と聞いていますが、こういう映画が日本でちゃんと公開されるのは画期的なことなので、まだ観ていない方は是非ご覧になってください。とっても面白いです。

ロシア映画の注目の監督たち

つい最近個人的にも嬉しい話だったので T-34 から始めたのですが、今日まだ名前が出ていないベテラン監督で、今絶好調だと私が思っているのがアンドレイ・コンチャロフスキー監督です(コンチャロフスキーはニキータ・ミハルコフ監督の実兄)。彼は今年も新作を作っているのですけれども、これが彫刻家ミケランジェロの伝記映画で、完全にルックはイタリア映画です。今年の東京国際映画祭で上映を検討し、ちょっと事情があって断念したのですが、非常に刺激的な作品を作っています。

私も含めて海外の映画祭プログラマーたちが、新作があれば飛びつく監督としては、やはりズヴァギンツェフですね。彼は、親子や夫婦の物語、家族の物語を強力なスタイルで骨太に描くので、現在、最も脂がのった監督として注目されています。

井上さんが挙げておられたボリス・フレーブニコフも、2 年前のカルロヴィ・ヴァリ国際映画祭で俳優賞を取った『不整脈』(2017 年)という作品が素晴らしい夫婦の物語で、これはまだ日本で紹介されていないのですが、非常に期待されている監督です。

もはや若手ではないのかもしれませんが、キリル・セレブリャンニコフ監督も注目です。彼は毎回作風が違うのですが、すごく過剰というか過激な内容で、映画祭受けがする監督の一人です(主な作品、『犠牲者を演じる』(2006 年)、『裏切り者』(2012 年)、『学生』(2016 年)など)。

映画を通じて世界を知る

ここからは若干デリケートな話ですけれども、国際映画祭の役割はやっぱり映画を通じて世界を知る、各国の状況を学んでいくというのが大きな楽しみの一つだと思います。私たち日本人は島国で、海外で起きていることをなかなか意識しづらい。そこを教えてくれるのが映画だと思います。

ここで話題に出していいのかどうかかわからないのですが、例えば今年の東京国際映画祭ではウクライナの作品が上映され、ウクライナとロシアとの間で起きている事を、映画を通じて知る。あるいは監督たちとのトークで理解を深めるということがありました。逆に今度はロシアの立場からの作品も見られるということで、このような映画祭が本当に意義深いのかなと思います。

旧ソ連地域の映画作品にも目を向けたい

旧ソ連地域の映画の中で私が好調な印象を受けているのは、カザフスタンとウクライナですね。例えばカザフスタンのセルゲイ・ドボルツェボイ監督が『アイカ』(2018 年)という作品で、カンヌ国際映画祭で賞を取っています。彼はカザフスタン出身ですが、新作はモスクワで撮っています。ウクライナ映画やカザフスタン映画、そしてバルト三国の映画も非常に充実しているので、ロシア映画を観ると同時にそれらを合わせて観ていくと、私たちの映画に対する喜びも、世界に対する知識も広がっていくと思います。国際映画祭をそういう形で続けていけたら良いなと考えてい

ます。

2016 年に、アンナ・マティソン監督の『天才バレエダンサーの皮肉な運命』(英語タイトル「After You're Gone」)という作品を東京国際映画祭で上映しました。日本人はやっぱり映画とクラシック音楽とかバレエが融合した作品を好みますね。主演のセルゲイ・ベズルコフさんも来日されて、東京国際映画祭史上おそらく最多の在日ロシア人の方々が集まり、すごく盛り上がりました。日本のバレエファンを交えて非常に楽しい上映になりました。

さまざまな魅力を持つロシア映画をこれからも紹介していきたいということで、私のパートを終わりたいと思います。

井上

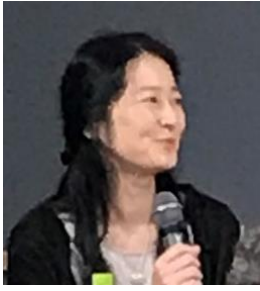
ドボルツェボイの名前が出たので、ちょっと一言だけつけ加えておきます。「ロシア映画＝ソビエト映画マイナス 14 の共和国」という話が出ましたが、それは正確ではなくて、旧ソ連圏の共和国からより大きなチャンスを求める人はモスクワへ来る。『ナイト・ウォッチ』のティムール・ベクマンベトフ監督もそうです。もともと彼はさらなる大きなチャンス求めてハリウッドへ行っていましたけれども、ドボルツェボイは、彼は民族的にはロシア人なのですが、カザフスタンで生まれて、カザフスタンで最初の映画を撮っていて、次の最新作はモスクワで作ったということなんですね。

ドボルツェボイ監督の『アイカ』という作品は、モスクワで働くキルギス人不法移民女性の物語ですが、昨年の東京フィルメックスで上映されグランプリを獲得した作品です。日本のキノフィルムズという配給会社が権利を買っているのですが、全然公開してくれないので、キノフィルムズに公開するように圧力を是非かけていただきたいと思います。

司会(沼野)

矢田部さんは、若干微妙な政治的なことにも触れられましたけれども、ここは大学ですから自由にそういう話をすべきです。お互いに問題があればそれもぶつけ合いながら是非話すべきだと思います。

それでは最後のパネリストとして守屋愛さんに話していただきます。守屋さんはこのロシア映画祭で日本語字幕の作成で大活躍されています。彼女は東京大学の大学院でロシア文学を専攻し、博士課程でセルゲイ・ドヴラートフという作家を専門に研究しました。つい最近、アレクセイ・ゲルマン・ジュニア監督が『ドヴラートフ レニングラードの作家たち』(2018 年)という映画を作りました。近々日本で上映される予定ですが、守屋さんと私が今それに関わって準備を手伝っているところです。



字幕翻訳の苦勞と醍醐味

守屋 愛 (ロシア映画祭日本語字幕翻訳者、
お茶の水女子大学ロシア語講師)

私は今回の映画祭で『俺たちには死が似合う』と『ラスト・ボガトゥイリ』、『目を閉じれば見える』、『ハラフ・オディ』、『深い川』の 5 本の字幕を担当しました。私たちが字幕で外国映画を観る時、実は気づかないうちに、そこでは大きな制約を受けています。今日は映画字幕では皆さんがどんな制約を受けているのかということ、字幕翻訳者からの言い訳のようですが、説明させていただきたいと思います。

時間の制約

小説の翻訳などとは異なり、映画字幕には、第一に、時間の問題というのがあります。日本語の字幕をつけるときには、1 秒間に 4 文字、1 画面に一行なら 15 文字まで、最大二行各 10 文字までという大まかな原則があります。というのも、観客の皆さんが字幕を読むのに一生懸命になってしまうと、せっかく監督たちが撮った美しい映像、俳優たちの熱演、肝心のものを堪能する時間がなくなってしまいます。ですから、実は字幕翻訳というのは役者さんが喋っていることの半分ぐらい、かなりの部分が削られて書かれています。新しい情報やキーワードは絶対に落せませんが、「へえ〜」とか「そう」といった間投詞とか、「私」とか「あなた」といった、呼びかけの名前とか、削除しても許容範囲と思われる箇所は、かなりの部分がカットされて字幕になっています。

吹替版と字幕版

知らない外国語の映画を観る時には、吹替版と字幕版の 2 つの方法があります。その際、言語的には吹替版の方がずっと多くの情報が入っています。一定の秒数なら、目で読むよりも耳で聞く方が多くの情報を処理できます。ところが、日本人の場合は、外国語の映画を観る時に、その作品の生の音を聞きたい、俳優たちの話す声をそのまま聞きたいと言う人が多いのです。ちなみに、ロシアでは吹替版の方が好まれているようですが、日本では、なんとなく、大人は字幕版を見るものというような伝統があります。

蛇足ですが、日本はアニメ文化が非常に豊かです。それに

伴って、最近では声優の人気が高く、有名な声優が吹替えをしているとそれだけである程度のファンがついてくるということもあります。それで、ハリウッド映画などでは有名な声優を起用してさらなる興行成績につなげるといった方法がとられたりもするのですが、ロシア映画が日本に紹介される場合は、字幕翻訳で観客に提供されることがほとんどです。

言語的なニュアンスの違い

次の問題は、字幕に翻訳する場合に、言語的な違いをどう埋めるかということです。語学的にロシア語と日本語は異なる言語であって、それをそのまま訳したつもりでも、プラスアルファ(ときにはマイナスアルファ)のニュアンスが出てきてしまうことが結構あります。例えば、ロシア語で「Я (ヤー)」というと、非常にシンプルに「自分」という一人称単数形なのですが、日本語では「私」「俺」「僕」…と「Я (ヤー)」に相当する言葉がいっぱいあります。ロシアの皆さんに説明するために、会場の皆さんは自分を何と呼んでいますか？ ちょっと手を挙げてみてください。

まず、「私」と言ってる方？ では「僕」と言ってる方？ では「俺」と言っている方？ (それぞれに参加者が挙手)——という具合に、日本語の「Я (ヤー)」はいろんな種類があります。

＜ロシア人パネリストからの質問＞ 「その違いはなんでしょうか？」

それはですね、きちんとした感じ、大人っぽい感じ、女性的な感じ、ちょっと荒々しい感じ、といったいろんなニュアンスが日本語の「Я (ヤー)」には入っているのです。

実は、今日のサリニコフ監督の作品の題名を変えたのは、私です。題名に「Я (ヤー)」が入っていたのでロシア語と同じニュアンスに訳すのが難しかったのです。文字通りに訳すと、原題は「僕が見るように見て」とか「私が見るように見て」となるのですが、「僕」にしても「私」にしても、それぞれプラスアルファのニュアンスが入ってしまう。「僕」なら主人公の少年マックスの視点、「私」なら主人公の少女オーリヤの視点という感じに。悩んだ末、「Я (ヤー)」が入っていない、映画のスローガンであった『目を閉じれば見える』というフレーズを、邦題にさせていただいたという次第です。

ボリス監督の『俺たちには死が似合う』の「俺たち」も、私としてはあの若い夫婦を指して「俺たち」と言うのには違和感があったのですが、それは私がお仕事を引き受ける前に決まっていたので、そのまま続行という形になりました。

文化の差をどう埋めるか

字幕翻訳では、さらに、文化的背景の差をどう埋めるかという問題もあります。例えば昨日上映された『ラスト・ボガトゥイリ』で「Дед Мороз (ジェド・マロース [註: マロースおじいさん。大晦日にやってきて子供たちにプレゼントをくれる。])」という単語が出てきました。日本には「ジェド・マロース」がいません。そのまま「ジェド・マロース」と書いてしまうと、多くの観客に理解

してもらえません。字幕では、そこで註をつけるわけにもいきません。瞬時に納得して次に進んでいただかないといけません。それなので、本当は違うのですが「サンタクロース」と字幕には書きました。もしここで「ジェド・マロース」と押し通してしまうと、ロシア映画ってよくわからないとか、取っつきにくいということになりかねません。そのようなわけで、小説などの翻訳よりも多少無理をして、敢えて日本人に馴染みやすい言葉を選んだり、観客の皆さんが感情移入しやすいように、敢えてシチュエーションにあわせた言い方に変えてしまったりしました。

以上のように、字幕翻訳はいろいろな制約を受けつつも、それらを何とかかわそうとした作業の末に完成した字幕が、皆さんに届けられているわけです。

最後に、さきほど私は 5 つの作品を翻訳したと言いましたが、その他の 4 作品は、いろいろな大学の学生さんやロシア人留学生の方など、たくさんの方にご協力いただいて字幕が完成しました。協力していただいた皆さんにもここでお礼を申し上げたいと思います。

司会（沼野）

字幕翻訳は普段なかなか日の当たらない仕事なんですけども、いかに複雑で重要なことかというのが良くわかって面白いお話でした。皆さんそれぞれに大変興味深い話をありがとうございました。予定ではそろそろシンポジウムを終わらなければならぬ時間なのですが、折角ですから、会場の皆さんから少しでも質問を受けたいと思います。

<質疑応答>

質問 1 セルゲイさんにお尋ねします。矢田部さんのお話にも関連することですが、東京国際映画祭では、ロシアの作品とともにかつてソ連邦を構成していたウクライナや、グルジア（ジョージア）などの作品も上映されています。カザフスタンで映画を作って、その後モスクワでも撮影している監督の話が出ましたが、ソビエト時代にはそういうロシアと各共和国との密接なネットワークがあったと想像するのですが、今現在、各国が独立してしまっただけではどうなっているのでしょうか？

映画人としての付き合いと言う意味で、もうコミュニケーションが断たれて外国との付き合いになってしまっているのか、それともコミュニケーションがまだ残っているのかということですが。

セルゲイ・ノヴォジロフ 手短にお答えします。1992 年にメリシュコ氏とセプシユク氏とともに 3 人で CIS およびバルト三国の映画祭“シネマショック”の代表を務めることになりました。この映画祭は 28 年間続いており、私は相変わらずその委員長を務めています。やはりソ連時代に生まれ育った中高年世代には文化的な交流に対する欲求がありますし、旧ソ連諸国は一つの文化圏に属しているという感覚があります。

シネマショックの場合もそうですが、このような映画祭の活動

資金はこれまでほぼロシア側が負担してきたので大変な時期もありましたが、やはりお互いの共通性というものに最大の意味を持たせて継続しています。残念ながら、旧ソ連諸国の間で経済的な格差が生まれてしまいましたので、資金力の面だけでなく映画産業の発達の度合いにおいても、違いが出てきているのは事実です。

本日話題にならなかったキルギスタンについて一言。キルギスでもなかなか素晴らしい若手映画人が出てきていて、ロシアの映画祭のみならず世界の国際映画祭で多くの賞を獲得しています。キルギスタンもカザフスタンでも第 2 国語はロシア語ですので、お互いにコミュニケーションを取ろうという意欲が強くあります。

一方、私はラトビアの国際フェスティバルの審査委員長を 7 年間務めています。そこでも若い世代であってもロシアと交流しようという強い意欲を感じています。政治は別として文化的な関係は残っていますし、文化的な交流に対する欲求はいつでもあります。そしてそれは大変良いことだと思います。

質問 2 アレクサンドラ・ジューコワさんに伺います。この 3 年間毎年日本に来ておられますが、ロシア映画と日本映画の文化的な共通点と相違点について、どう思われますか？

アレクサンドラ・ジューコワ 共通点については語りやすいかと思います。日本の映画にはそれなりの哲学や思索への欲求があると思います。例えば、日本人はドストエフスキーが大好きなようですが、日本映画を観ると何か哲学的なニュアンスを感じます。そして、ロシアを代表する監督たち——本日のシンポジウムで言及されたロシアの監督たちは、みんな真面目で思慮深い人たちです。ロプシャンスキーやコンチャロフスキーなどはとくにそうです。

相違点についてですけれども、私たちは確かに違いが沢山ありますが、それは決してお互いの文化や文学、映画を勉強する障害にはなりません。確か現在モスクワのトレチャコフ美術館において山田洋二監督の回顧展をやっていると思います。

また、日本のアニメはロシアでとても人気で、宮崎駿や新海誠はよく知られています。アニメの愛好家団体も存在しますし、アニメ専用の配給会社も存在します。ノヴォジロフさんが代表をしているラトビアでの映画祭でも、日本の最近の短編映画や昔のアニメが上映されました。

司会（沼野）

時間が来てしまいました。大変中身の充実した話ができました。ノヴォジロフさんの最後の発言の中に、「政治的な問題があっても文化的な交流に対する欲求というのはいつもあるんだ」という趣旨の言葉がありました。それが、今日のシンポジウムの意味でもあるし、結論としてふさわしい言葉じゃないかと思いました。どうもありがとうございました。

《再録》 JICインフォメーション第205号(20年3月発行)より

第3回ロシア映画祭 in 東京

12月12日から18日まで第3回ロシア映画祭 in 東京を開催しました。2017年から始まったこの映画祭は、ロシア文化省の主催で、その委託を受けたモスクワ God Kino 社と JIC 国際親善交流センターらで作る日本側実行委員会が協力して開催しているものです。第3回目の昨年は、新たに日ロ協会、日ロ交流協会に実行委員会に参加していただき、連日、映画好き、ロシア好きの観客を集めることができました。(編集部)。



開会式(12月12日)で挨拶するロシア側代表

協力の輪が広がったロシア映画祭

今回の映画祭の上映スケジュールは、下表の通りです。

現代ロシア社会を背景としつつ信仰の意味を問いかける「黒いガラス」、男女関係4部作とも言えるべきラブコメディ「予想外のでき事」、iphone撮影によりフィクションとドキュメンタリーが融合したような臨場感のある実験的作品「俺たちには死が似合う」、現代のモスクワとロシアのおとぎ話を組み合わせたエンターテインメント映画「ラスト・ボガトウイリ」、…。そのほか、どれをとっても面白い作品ばかりで、観客の皆さんからは「素晴らしかった」と大好評でした。

本映画祭は、最新のロシア映画を紹介するのが大きな目的で、上映作品の大半は2019年に公開されたばかりの最新映画。コメディあり、ファンタジーあり、メロドラマ、悲喜劇ありと、バラエティに富んだ作品群はロシア映画の幅の広さと層の厚さを実感させるものでした。

また、上映作品の監督、プロデューサー、俳優らが映画祭に合わせて来日し、作品の上映後に観客と質疑応答を交わすのも、本映画祭の大きな特徴です。今回は、モスクワ God Kino

社のセルゲイ・ノヴォジロフ代表(「予想外のでき事」プロデューサー)をはじめ10名が来日し、各会場で観客と交流を行いました。

全作品の日本語字幕を日本側で制作

今回の映画祭でこれまでにない新しい取り組みとしては、まず第一に、日本語字幕を日本側で翻訳・制作したことです。第2回映画祭での「自動翻訳騒動」に凝りて、今回は早々にロシア側と交渉し、守屋愛さんをリーダーとする日本語字幕制作チームを立ち上げて、2か月間の突貫工事で字幕制作を進めていただきました。おかげで、質の高い日本語字幕が完成し、作品内容の理解がより深まり、観客の感動を呼ぶことができました。

非常に限られた予算で、しかも短期間に、8本もの作品の字幕制作を完成させることができたのは、ひとえに協力していただいた皆さんのボランティア精神と献身の賜物です。深く感謝する次第です。

第3回ロシア映画祭 in 東京 上映作品一覧

12月12日	「黒いガラス」(コンスタンチン・ロプシャンスキー監督)	渋谷・シダックスホール
12月13日	「予想外のでき事」(アンドレイ・ムイシュキン監督)	麻布台・ロシア大使館付属学校ホール
12月14日	「俺たちには死が似合う」(ボリス・グッツ監督)	神保町・専修大学法学部教室
	「ラスト・ボガトウイリ 最後の勇士」(ドミトリー・ジャチェンコ監督)	同上
12月15日	「目を閉じれば見える」(ゲオルギー・サリニコフ監督)	本郷・東京大学文学部大教室
12月16日	「ポジティブに考えろ」(短編/イリーナ・ホデュシュ監督)	府中市・バルトホール
	「選択の権利〜ヴェーラ編」(エカテリーナ・ウスチュゴワ監督)	同上
12月17日	「ハラフ・オディ」(ミハイル・メルズリキン監督)	恵比寿・東京都写真美術館ホール
12月18日	「深い河」(ウラジーミル・ビトコフ監督)	恵比寿・東京都写真美術館ホール



上映後のトーク（観客の質問に答えるサリニコフ監督）



シンポジウム（12月15日、東京大学文学部教室にて）

シンポジウム「映画を観れば『今のロシア』が見える」

第二に、映画製作者と観客との双方向の意見交換を毎回行ってきた延長上に、シンポジウム「映画を観れば『今のロシア』が見える」（12月15日、東京大学文学部大教室にて）を開催したことも、これまでにない新しい取り組みでした。

沼野充義・東京大学文学部教授の司会進行で、日本側報告者には、ロシア映画研究の第一人者である井上徹氏、東京国際映画祭プログラミング・ディレクター矢田部吉彦氏、また日本語字幕制作チームの守屋愛氏に参加していただき、ロシア側からも映画「目を閉じれば見える」のサリニコフ監督をはじめ3名の報告をいただき、ロシア映画の可能性を語り合っていました。

時間的な制約でより突っ込んだ議論にまで踏み込むことはできませんでしたが、今後の日ロ映画交流の発展につながる第一歩をしるすことができました。

ロシア語・ロシア関係者に広がった協力の輪

さらに、映画祭実行委員会の枠組みも今回から大きく変わりました。前2回までは当センター（JIC）とユーラシア国際映画祭が中心になって日本側実行委員会を組織してきたわけですが、今回から日ロ協会（高村正彦会長）、日ロ交流協会（有馬朗人会長）が実行委員会に加わりました。また東京大学、専修大学、早稲田大学、東京外国語大学、創価大学、慶應義塾大学、お茶の水女子大学、日本ロシア文学会などにも協力をいただき、ロシア語・ロシア研究者の方々に広く宣伝を行うことができました。

日露学生会議や日ロ学生交流会、また守屋愛さんのロシア語授業を受けている学生の皆さんがボランティアで会場整理や受付に協力してくれました。

残された課題

このようにたくさんの成果があった今回の映画祭ですが、残された課題もまた多くあります。

ロシア関係者の間ではある程度宣伝が広がってきたもの

の、その一方で、映画ファンや映画関係者への周知はまだまだ進んでいません。アンケートでも「もっと広く告知してください。マニア仲間は誰も知らなかった」と激励&お叱りを受けました。

映画祭の会場がほぼ毎日変わり参加者に不便をかけたことや、開場時間、開会時間が明確でなく、会場運営が稚拙だったことなど（「大学の学祭レベル」と手厳しい批判もあった）、アンケートで指摘を受けました。12月17日に映画祭と直接関係のない宣伝パフォーマンスが会場で行われたことにも強い不満が寄せられました。

「質問は簡潔に一つだけ。自己満足の『自分語り』はしないように」とか、「上映中にスマホに触らぬよう徹底注意を」といった観客マナーに関する意見もアンケートでは多数寄せられました。

また、実行委員会として残念だったのは、事前申し込みでは満席で2-3日前に受付を締め切ったにもかかわらず、当日キャンセルが2割以上もあり、会場に空席が目立つ日が何回もあったことです。「無料上映」故のキャンセルはある程度織り込んでいたものの、3割近いキャンセルがあった日には正直少しばかりへこみました。

もちろん、映画祭の開催が最終的に決まるのが、早くて6か月前（今回の第3回映画祭の場合は3か月前の9月だった）というロシアと一緒に仕事をする際に特有の困難な事情があることは事実です。きわめて短期間で、会場予約や日本語字幕作成、宣伝物やパンフレットの作成などの準備を進める必要があります。多くの関係者の方々の協力なしには映画祭を実行することができません。

一挙に解決できない問題もありますが、もし次回、第4回ロシア映画祭を開催するチャンスがあるならば、今回の教訓を踏まえて、より参加者の皆さんに楽しんでもらえる映画祭にしていきたいと考えています。

ご協力、ありがとうございました。

（ロシア映画祭実行委員会、伏田昌義）